2020_1_25～2_6、2_8～3_12、3_19～25、3_29～3_31、5_2～5/3、
5/13～14、7/29～8/7、8/20～25、8/27～9/10、9/11～12

ホツマツタヱ講座

ホツマツタヱ　７アヤ（紋）　　解説文

ホツマツタヱ研究家　吉田六雄

７アヤ（紋）【件名】

ホツマツタヱミハタノナ	ホツマツタヱ御旗の七
ノコシフミサガオタツアヤ	遺し書祥禍お立つアヤ（綾）

ホツマツタヱ本文

７アヤ（紋）１（１行）～６０（４行）【本文】

	ヲシテ	カナ文字	現在訳	
1		モロカミノ　サガオタツトキ	諸神の　祥お断つ時	
		サホコヨリ　ツハモノヌシガ	細矛より　ツハモノヌシが	
		カグミヤニ　キギストバセテ	香久宮に　聞ぎす飛ばせば	
		マスヒトガ　タミノサシメノ	マスヒトが　民のサシメの←メ←ミ	
		ツマトナス　クラヒメウメハ	妻となす　クラ姫生めは	
		イツクシミ　アニノコクミオ	慈しみ　兄のコクミお	
		コノコトク　サホコチタルノ	子の如く　細矛・千足の	
3		マスヒトヤ　イマハソエナリ	マスヒトや　今は副えなり	
		クラギネガ　マカレルトキニ	クラギネが　逝れる時に	
		シラヒトオ　ネノマスヒトニ	シラヒトお　ネのマスヒトに	
		クラコヒメ　ミオタテヤマニ	クラコ姫　遺体を立山に	
		ヲサムノチ　ハハコオステテ	納む後　母娘を捨てて　←ム←ミ	
		ツニオクル　コクミハハコオ	ツに送る　コクミ母娘お	
		オカスツミ　カンサヒコレオ	犯す罪　カソサヒこれお	
		タダサネハ　トミコレオコフ	糾さねば　臣これを請ふ	
5		ミハタヨリ　サオシカニメス	宮廷より　勅使に召す	
		カンサヒト　コクミハハコト	カンサヒと　コクミ母子と	
		タカマニテ　カナサキトワク	高天にて　カナサキ問わく	
		コクミイフ　サシメハマコト	コクミいふ　サシ女はまこと	
		ワガツマヨ　キミサリマスノ	わが妻よ　君去りますの	
		オシテアリ　マタトフナンチ	オシテあり　また問ふ汝	
		ナニヒトゾ　タミトイフニゾ	何人ぞ　民といふにぞ	
		オタケビテ　ケモノニオトル	雄叫びて　獣に劣る-	
7		ツミヒトヨ　サシメササクル	罪人よ　サシ女捧くる	
		ユカリニテ　マスヒトトナル	縁故にて　マスヒトとなる	

			ミメクミノ	キミナリハハヨ	御恵みの	君なり、母よ
			サガミレハ	キミオワスルル	祥みれは	君を忘るる
			モモクラト	ハハモフソクラ	百座と	母も二十座
			オカスルモ	オシテノハチモ	犯するも	オシテの恥ち
			モモトモモ	ヒメナイガシロ	百と百	姫ないがしろ
			十ソクラト	スヘテミモナソ	五十座と	総て三百七千
9			アマメクリ	ミモムソタビオ	天巡り	三百六十度お
			トホコノリ	トコロオサルト	瓊矛法	処お去ると
			サスラフト	マシハリサルト	流離ふと	交り去ると
			イノチサル	ヨツワリスギテ	命去る	四つ割り過ぎて
			ホコロビト	ツツガニイレテ	綻びと	ツツガに入れて
			ネノクニノ	シラヒトオメス	ネの国の	シラヒトお召す
			タカマニテ	カナサキトワク	高天にて	カナサキ問わく.
			ハハオステ	ツマサルイカン	母お捨て	妻去る如何
11			コタエイフ	オノレハサラズ	答え云ふ	己は去らず
			ハハヨリゾ	十エステイヅル	母よりぞ	家捨て出づる
			ヒメモママ	マタモトオトフ	姫もまま	また原因お問ふ
			コタエイフ	ヨヨノトミユエ	答えいふ	代々の臣故
			コトナセリ	ハハハタミノメ	子となせり	母は民の女
			ススメテゾ	キミノツマナリ	進めてぞ	君の妻なり
			オンメグミ	ナニワスレント	御恵み	何忘れんと
			十十ナガス	カンミムスビノ	言い流す	カンミムスビの
13			シカリテゾ	ナンヂカサリテ	叱りてぞ	汝飾りて
			マドワスヤ	ワレヨクシレリ	惑わすや	われよく知れり
			トモオコヱ	チカラオカシテ	同輩を越ゑ	カを貸して
			ハハガアゲ	マツリサヅケテ	母があげ	政り授けて
			コトナスオ	ハハニシタエハ	子となすお	母にしまえば
			ヒメガウム	カクサンタメニ	姫が倦む	隠さんために
			ナガシヤリ	タミノメウバヒ	流しゃり	民の女奪ひ
			チカラカス	メクミワスルル	力貸す	恵み忘るる
15			フモモクラ	サルモモモクラ	二百座	去るも百座
			フムガ十ソ	ツカムノムソト	踏むが五十座	つかむの六十座と
			ヨモソクラ	コレノカルルヤ	四百十座	これ逃るるや
			コタヱネハ	ツツガニイレテ	答ゑねば	獄舎に入れて
			オヲンカミ	モロトハカリテ	大御神	諸神と議りて
			ヤソキネオ	ネノクニカミト	ヤソキネお	ネの国守と
			イサナキノ	ウブヤニオヂト	イサナギの	産屋に祖父と
			オバナレハ	マツリタヱスト	祖母なれば	祭政絶ゑずと

１７			ミコトノリ	モチテタミタス	勅り	以て民治す、
			オヂトオバ	シラヤマカミソ	祖父と祖母	白山神ぞ
			イサナギハ	マツレトオトノ	イサナギは	祀れど弟の
			クラキネハ	マツラズモチガ	クラキネは	祀らず、モチ(コ)が
			クラヒメオ	カンサヒノコノ	クラ姫お	カンサヒの子の
			アメオシヒ	メアワセスケガ	アメヲツヒ	婚わせ典侍が
			アニトナシ	チチマスヒトノ	兄となし	父マスヒトの
			マツリツグ	シラヒトコクミ	政り継ぐ	シラビト、コクミ
１９			コノイワヒ	ナカバサオヱテ	子の祝ひ	半ば祥を得て
			サスラヒオ	ヒカワニヤルオ	流離ひお	簸川に追放るお
			マスヒトノ	ワガトミトナス	益入の	わが臣となす
			ソサノオハ	コレトトノヒテ	ソサノオは	これ整ひて
			マナ丰ナル	カミニマフデル	真名井なる	神に詣でる
			ソノナカニ	タオヤメアレバ	その中に	手弱女あれば
			コレオトフ	マカタチコタフ	これを間ふ	従女答ふ
			アカツチガ	ハヤスフヒメト	アカツチが	ハヤスフ姫と
			キコシメシ	キジオトバセテ	聞し召し	急使を飛ばせて
			チチニコフ	アカツチミヤニ	父に請ふ	アカツチ宮に
			トツガント	イエドミヤナク	嫁がんと	いえど宮なく
			オオウチノ	オリオリヤトル	大内宮の	折々宿る
			ネノツボネ	ヱトヤスメトテ	北の局	姉妹休めとて
			ウチミヤノ	トヨヒメメセバ	中宮の	豊姫召せば
			ネノツホネ	サガリナケケバ	北の局	退り嘆けば
			ソサノオガ	タタヱカネテゾ	ソサノオが	耐かねてぞ
２３			ツルギモチ	ユクオハヤコガ	剣持ち	行くおハヤコが
			オシトトメ	イサオシナラハ	押し留め	功ならば
			アメガシタ	ハナゴキタレバ	天が下	ハナコ来たれぱ
			ホコカクス	ミヌカホスレド	矛隠す	見ぬ顔すれど
			ウチニツゲ	アルヒタカマノ	中宮に告げ	ある日高天の
.			ミユキアト	モチコハヤコオ	御幸あと	モチコ.ハヤコお
			ウチニメス	ヒニムカツヒメ	中宮に召す	日に向津姫_
			ノタマフハ	ナンチラヱトガ	曰ふは	汝らヱト（姉妹）が
２５			ミケヒエテ	ツクシニヤレハ	御笥飯得て	筑紫に追れは
			ツグミオレ	タナキネハトル	つぐみ居れ	タナキネは取る
			オハチチニ	メハハハニツク	男は父に	女は母につく
			ミヒメコモ	トモニクタリテ	.三姫子み	共に下りて
			ヒタシマセ	カナラスマテヨ	饗有しませ	必ず待てよ
			トキアリト	ムヘネンコロニ	時ありと	むべ懇ろに

			サトサレテ	ツクシアカヅチ	諭されて	筑紫アカヅチ
			コレオウケ	ウサノミヤヰオ	これを受け	宇佐の宮居を
27			アラタメテ	モチコハヤコハ	改めて	モチコ.ハヤコは
			アラツホネ	オケバイカリテ	新局	置けば怒りて
			ヒタシセズ	ウチニツクレバ	養育しせず	中宮に告ぐれば
			トヨヒメニ	ヒタシマツラシ	豊姫に	養育しまつらし
			サスラナス	フタサスラヒメ	流離なす	二さすら姫
			イキドホリ	ヒカハニイタリ	憤り	簸川にいたり
			ナルオロチ	ヨニワタカマリ	なるヲロチ	世に蟠り
			コクミラモ	ツカエテシムオ	コクミらも	仕えて心神る
29			ウバイハム	ソサオノシワザ	奪い喰む	ソサオの仕業
			アヂキナク	ノシロシキマキ	味気なく	野（苗）代重播き
			アオハナチ	ミノラズミゾノ	畔お放ち	実らずみ稲の
			ニイナメノ	カンミハオレハ	新嘗の	神衣織れは
			トオケガス	コレタタサレテ	トお汚す	これ糾されて
			ソサノオガ	ヒトリカフムル	ソサノオが	一人かふむる
			ヰンハトノ	トヅレバイカル	ヰンハ殿	閉づれば怒る
			ブチコマオ	ヰラカウガチテ	斑駒お	甍穿ちて
31			ナゲイルル	ハナコオドロキ	投げ入るる	ハナコ驚き←コ←ご
			ヒニヤフレ	カミサリマスト	ひに破れ	神去りますと
			ナクコエニ	キミイカリマシ	泣く声に	君怒りまし
			ソサノオニ	ナンヂキタナク	ソサノオに	汝汚く
			クニノゾム	ミチナスウタニ	国望む	道なす歌に
			アメガシタ	ヤワシテメクル	天が下	和して巡る
			ヒツキコソ	ハレテアカルキ	日月こそ	晴れて明るき
			タミノタラナリ		民のタラ（親）なり	
33			ソサノオハ	イワオケチラシ	ソサノオ	岩お蹴散らし
			ナオイカル	キミオソレマシ	なお怒る	君恐れまし
			イワムロニ	イレテトサセバ	岩室に	入りて閉させば
			アメガシタ	カガモアヤナシ	天が下	光影も彩なし
			ヤスガハノ	ヤミニオドロク	安河の	闇に驚く
			オモイカネ	タビマツニハセ	オモイカネ	手火松に馳せ
			コニトイテ	タカマニハカリ	子に問いて	高天に諮り
			ヰノランヤ	ツハモノヌシガ	祈らんや	ツハモノヌシが
35			マサカキノ	カンヱハニタマ	マサカキの	上枝はニタマ（瓊玉）
			ナカツヱニ	マフツノカガミ	中つ枝に	真経津の鏡
			シモニキテ	カケヰノラント	下、和幣	懸け祈らんと
			ウスメラニ	ヒカゲオタスキ	ウスメらに	日影お襷

			チマキホコ	オケラオニハヒ	茅巻き矛	朮お庭火
			ササユハナ	カンクラノトノ	笹湯花	神楽の殿
			カンカガリ	フカクハカリテ	神篝火	深く謀りて
			オモイカネ	トコヨノオトリ	オモイカネ	常世の踊り
37			ナガサキヤ	ワザオキウタフ	長幸や	わざおき歌ふ,
			カクノキ	カレテモニホユ	香久の木	枯れてち匂ゆ
			シホレテモヨヤ	アガツマ	萎れても艮や	吾が妻
			アワ	アガツマアワヤ	シホ	あわ　吾が妻あわや　萎
			レテモヨヤ	アガツマ	アワ	れても良や　吾が妻　あわ
			モロカミハ	イハトノマエニ	諸神は	岩戸の前に
			カシマドリ	コレゾトコヨノ	鹿島鶏	これぞ常世の
			ナガサキヤ	キミヱミホソク	長幸や	君笑み細く-
39			ウカカエハ	イハトオアグル	伺えば	岩戸を投ぐる
			タチカラオ	ミテトリイダシ	タチカラオ	御手取り出し
			タテマツル	ツハモノヌシガ	奉る	ツハモノヌシが
			シメナワニ	ナカエリマシソ	注連縄に	な帰りましそ
			シカルノチ	タカマニハカリ	然る後	高天に諮り
			ソサノオノ	トガハチクラノ	ソサノオの	罪科は千座の
			ミキダガレ	カミヌキヒトツ	三段枯れ	髪抜き一つ
			ツメモヌキ	マダトトカネバ	爪も抜き	まだ届かねば
41			コロストキ	ムカツヒメヨリ	殺す時	向津姫より
			サオシカニ	ウケモノイノリ	勅使に	ウケモノ祈り
			ヨミカエス	ハナゴノヨモサ	蘇す	ハナコの四百祥
			ツクノヱハ	サガオアカセヨ	償えば	祥禍を明せよ
			ソサノオガ	シワザハシムノ	ソサノオが	仕業は血脈の
			ムシナレド	サガナクツツガ	虫なれど	祥無くつつが（恙）
			ナカランヤワヤ		無からんやわや	
			コトノリオ	モヨガハカリテ	勅りお	諸神が議りて
43			アメモトル	オモキモシムノ	天、悖る	重きも血縁の
			ナカバヘリ	マシワリサルト	半ば減り	交わり去ると
			スガサアオ	ヤヱハヰモトム	す笠、青衣	八重這ゐ求む
			シタタミノ	サスラヤライキ	下民の	流離やらいき
			オヲンカミ	シロシメサレハ	大御神	知し召されば
			アマテラス	ヒトノオモテモ	天照らす	人の面も
			タノシムニ	ミチスケノウタ	楽しむに	遺すけの吹
			アハレ	アナオモシロ	天晴れ	あなおもしろ
45			アナタノシ	アナサヤケ	あな楽し	あなさやけ
			オケ	サヤケオケ	おけ	さやけをけ

			アワレ	オモシロ	あわれ	おもしろ
			サヤケオケ	アナタノシ	さやけおけ	あな楽し
			アヒトモニ	テオウチノベテ	相共に	手お打ちのべて
			ウタヒマフ	チハヤフルトゾ	歌ひ舞ふ	千早振るとぞ
:			タノシメハ	コレカンクラニ	楽しめば	これ神楽に
			アマテラス	オヲンカミナリ	天照	大御神なり
47			サスラオハ	ミコトオウケテ	サスラオは	勅お受けて
			ネニユカン	アネニマミエル	ネに行かん	姉にまみえる
			シバシトテ	ユルセハノボル	暫しとて	許せば上る
			ヤスカハベ	フミトトロキテ	安河辺	踏み轟きて
			ナリウコク	アネハモトヨリ	鳴り動く	姉はもとより
			サスラオガ	アルルオシレハ	サスラオが	荒るるお知れば
			オトロキテ	オトトノクルハ	驚きて	弟の来るは
			サハアラジ	クニウバフラン	さはあらじ	国奪ふらん
49			カゾイロノ	ヨザシノクニオ	かぞいろ（父母）の	任しの国お
			ステオレハ	アヱウカガフト	捨ておれば	敢窺ふと
			アゲマキシ	モスソオツカネ	総角し	裳裾お束ね
			ハカマトシ	ヰモニミスマル	袴とし	五百に御統
			カラマキテ	チノリヰモノリ	から巻きて	千矩、五百矩
			ヒチニツケ	ユハズオフリテ	肱に着け	ゆはずお振りて
			ツロギモチ	カタニワフンテ	剣持ち	堅庭踏んで
			ケチラシテ	イツノオタケニ	蹴散らして	厳の雄叫に
51			ナジリトフ	ソサノオイワフ	詰り問ふ	ソサノオ曰く
			ナオソレソ	ムカシネノクニ	な恐れそ	むかしネの国
			ユケトアリ	アネトマミヱテ	行けとあり	姉と目見えて
			ノチユカン	ハルカニクレバ	後行かん	遥かに来れば
			ウタガワデ	イツカヱシマセ	疑わで	厳返しませ
			アネトワク	サココロハナニ	姉問わく	清心は何
			ソノコタエ	ネニイタルノチ	その答え	ネにいたる後
			コオウマン	メナラハケガレ	子を生まん	女ならば穢れ
53			オハキヨク	コレチカイナリ	男は清く	これ誓いなり
			ムカシキミ	マナヰニアリテ	昔、君	真名共にありて
			ミスマルノ	タマオソソキテ	御統の	玉を渥ぎて
			タナギネオ	モチニウマセテ	タナギネお	モチ（コ)に生ませて
			トコミキニ	ハヤコオメセハ	床酒に	ハヤコを召せば
			ソノユメニ	トツカノツルギ	その夢に	十束の剣
			オレミキダ	サカミニカンデ	折れ三段	さ噛みに噛んで
			ミタトナル	ミタリヒメウム	三玉となる	三人姫生む

５５		タノイミナ	ワレケガレナハ	タのイミ名	われ穢れなば
		ヒメオヱテ	トモハヂミント	姫を得て	共恥見んと
		チカイサル	ヒメヒトナリテ	誓ひ去る	姫一人成りて
		オキツシマ	サカムヱノシマ	沖つ島	相模江の島
		イツクシマ	ミカラサスラフ	厳島	自ら流離ふ
		サスラオノ	カゲノミヤビノ	サスラオの	陰のみゃびの
		アヤマチオ	ハラシテノチニ	過ち	はらして後に
		カエリマス	ムカシフタカミ	帰ります	昔両神
５７		ノコシフミ	アメノメクリノ	遺し書	天の巡りの
		ムシバミオ	ミルマサカニノ	むしばみ（日蝕）お	見るマサカニの
		ナカコリテ	ウムソサノオハ	中凝りて	生むソサノオは
		タマミタレ	クニノクマナス	魂甜れ	国の隈なす
		アヤマチソ	オハチチニヱテ	過ちぞ	男は父に得て
		ハオイダケ	メハハハニヱテ	地を抱け	女は母に得て
		アトヰネヨ	ウキハシオヱテ	天と寝ねよ	浮橋を得て
		トツグベシ	メハツキシホノ	嫁ぐべし	女は月経の
５９		ノチミカニ	キヨクアサヒオ	後三日に	清く朝日お
		オカミウケ	ヨキコウムナリ	拝み受け	良き子生むなり
		アヤマリテ	ケガルルトキニ	過りて	穢るる時に
		ハラムコハ	カナラスアルル	妊む子は	必ず荒るる
		マエウシロ	ミダレテナガル	前後	乱れて流る
		ワガハチオ	ノチノオキテオ	わが恥お	後の捉の
		ウラカタゾ	カナラズコレオ	占形ぞ	必ずこれお
		ナワスレソコレ		な忘れそこれ	

７アヤ（紋）【件名】

[illegible]	ホツマツタヱミハタノナ	ホツマツタヱ御旗の七
[illegible]	ノコシフミサガオタツアヤ	遺し書祥禍お立つアヤ（綾）

ホツマツタヱ解説

７アヤ（紋）１（2 行）～３（1 行）【本文】

	ヲシテ		カナ文字		現在訳	
1	[illegible]	[illegible]	モロカミノ	サガオタツトキ	諸神の	祥お断つ時
	[illegible]	[illegible]	サホコヨリ	ツハモノヌシガ	細矛より	ツハモノヌシが
	[illegible]	[illegible]	カグミヤニ	キギストバセテ	香久宮に	雉子飛ばせば
	[illegible]	[illegible]	マスヒトガ	タミノサシメノ	マスヒトが	民のサシメの←サシミ
	[illegible]	[illegible]	ツマトナス	クラヒメウメハ	妻となす	クラ姫生めは
	[illegible]	[illegible]	イツクシミ	アニノコクミオ	慈しみ	兄のコクミお
	[illegible]	[illegible]	コノコトク	サホコチタルノ	子の如く	細矛・千足の
3	[illegible]	[illegible]	マスヒトヤ	イマハソエナリ	マスヒトや	今は副えなり

語句の解説

・サガ→自分の家系の秩序を乱す行為。（吉田説）　大辞林（概略）さが⇒うまれつきの性質。もって生まれた性分。

・マスヒト→優れた人。　大辞林（概略）ます⇒自動詞③に優越する。すぐれる。

・キギス→きぎす　【▼雉子】　キジの古名。季　春。「焼け野の一」

・カンサヒ→トヨケ神の子、八十杵の弟

原文の現在訳

諸神の　祥お断つ時　細矛より　ツハモノヌシが　香久宮に　キギス飛ばせば　マスヒトが　民のサシメの　妻となす　クラ姫生めは　慈しみ　兄のコクミお　子の如く　細矛・千足の　マスヒトや　今は副えなり

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

天の原では、アマテル神が**諸神**に自分の家系の秩序を乱す行為**の祥お断つ**ようにと勅りされている**時、細矛**（山陰地方の古名）**より**天児屋根の父である**ツハモノヌシ**（春日殿）**が**政務されている伊雑の**香久宮に、キギス**（キジの古名）を**飛ば**して、祥を起こしたとの悪い知ら**せ**を伝える者あれ**ば、**その知らせの詳細は「ネの**マスヒト**（優れた人⇒地方の長官）のクラギネ（イサナギの弟）**が、民のサシメ**（女の名前）を自分**の妻となす**」とのことであった。当時は、君、臣、民の身分がはっきりと分かれていた頃であった。

そのため、臣のクラキネが民を妻とすることは御法度であった。その禁を破って結婚し、クラギネの妻になったサシメが**クラ姫を生めは慈しみ**と云う古代にはない風景まで演出させていた。更に、傲慢さは拡大しサシメの**兄のコクミお**我が**子の如く**優遇し、**細矛**（鳥取）**・千足**（島根）**のマスヒト**に赴任させる**や今は**コクミを自らのネの国のマスヒトの**副え**まで就任される**なり。**

7アヤ（紋）3（2行）～4（4行）【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳	
	クラギネガ　マカレルトキニ	クラギネが　逝れる時に	
	シラヒトオ　ネノマスヒトニ	シラヒトお　ネのマスヒトに	
	クラコヒメ　ミオタテヤマニ	クラコ姫　ミ（遺体）お立山に	
	ヲサムノチ　ハハコオステテ	納む後　母娘を捨てて	←ム←ミ
	ツニオクル　コクミハハコオ	ツに送る　コクミ母娘お	
	オカスツミ　カンサヒコレオ	犯す罪　カンサヒこれお	
	タダサネハ　トミコレオコフ	糾さねば　臣これを請ふ	

シラヒト、コクミ系図

【シラヒト、コクミの人間関係】は、次の図をご覧下さい。　　識別　━　線は、兄弟を示す。

━　線は、夫婦を示す。

兄弟
- ココリ姫（姉）
- イサナギ　　継子→親子の関係にはあるが、血のつながっていない子
- クラギネ（弟、ネのマスヒト）・・シラヒト（継子、ネのマスヒト）

||・・・・・・・クラコ姫（クラギネの死後、ツ（西）に送られる）

兄弟
- サシメ　（コクミの姉、クラキネの后、義母、クラギネの死後、ツ（西）に送られる）

||（政略結婚、コクミは、姉のサシメをわが妻にする悪行である。）

- コクミ　（サシメの兄、ツの細矛・千足国のマスヒト、副）

原文の現在訳

クラギネが　逝れる時に　シラヒトお　ネのマスヒトに　クラコ姫　ミ（遺体）お立山に　納む後　母娘を捨てて　ツに送る　コクミ母娘お　犯す罪　カンサヒこれお　糾さねば　臣これを請ふ

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

イサナギの弟の**クラギネが逝れる時に**クラキネは、自らの継子の**シラヒトお、ネ**の地方（山陰地方、西の細矛国と東の千足国を合わせた国）**のマスヒト**（長官）**に**任命されていた。そして、自らが亡くなると、**クラコ姫**は神妙に父クラキネの**ミ**（遺体）**お立山に納む**のでした。その直**後**、継子のシラヒトの横暴な悪政が始まるのです。シラヒトはクラキネが亡くなったのを幸いに、血の繋がりがない義**母**のサシメ、義**娘**のクラコ姫**お**ゴミのように**捨てて、ツ**（西の細矛）のコクミの元**に送る**などしたのです。そして、ネ（山陰地方）の**コクミ**は、マスヒトと云う要職でありながら、シラヒトより送られて来た母娘お強姦し古代の大スキャンダルと呼ばれる**母娘お犯す罪**を引き起こしてしまったのです。そこで、天の原の政庁は、ネ（細矛と千足を合わせた国）の一方の東の千足国のマスヒトを治めていたトヨケ神の子の八十杵の弟の**カンサヒ**に、「**これ**（母娘お犯す罪）**お糾さねば**ならない。」と**臣**のカンサヒに勅りして、糾すように**これを請ふ**のでした。

７アヤ（紋）５（１行）～１０（１行）【本文】

	ヲシテ		カナ文字		現在訳	
5			ミハタヨリ	サオシカニメス	御旗より	勅使に召す
			カンサヒト	コクミハハコト	カンサヒと	コクミ母子と
			タカマニテ	カナサキトワク	高天にて	カナサキ問わく
			コクミイフ	サシメハマコト	コクミいふ	サシメはまこと
			ワガツマヨ	キミサリマスノ	わが妻よ	君去りますの
			オシテアリ	マタトフナンチ	オシテあり	また問ふ汝
			ナニヒトゾ	タミトイフニゾ	何人ぞ	民といふにぞ
			オタケビテ	ケモノニオトル	雄叫びて	獣に劣る-
7			ツミヒトヨ	サシメササクル	罪人よ	サシメ捧くる
			ユカリニテ	マスヒトトナル	縁故にて	マスヒトとなる
			ミメクミノ	キミナリハハヨ	御恵みの	君なり、母よ
			サガミレハ	キミオワスルル	祥みれは	君を忘るる
			モモクラト	ハハモフソクラ	百座と	母も二十座
			オカスルモ	オシテノハチモ	犯するも	オシテの恥ち
			モモトモモ	ヒメナイガシロ	百と百	姫蔑ろ
			ヰソクラト	スヘテミモナソ	五十座と	総て三百七十
9			アマメクリ	ミモムソタビオ	天巡り	三百六十度お
			トホコノリ	トコロオサルト	瓊矛法	所お去ると
			サスラフト	マシハリサルト	流離ふと	交り去ると
			イノチサル	ヨツワリスギテ	命去る	四つ割り過ぎて
			ホコロビト	ツツガニイレテ	綻びと	ツツガに入れて

語句の解説

・ミハタ→御旗（錦の御旗）→宮廷のこと。

・ナニヒト→なに ひと 【何人】 どのような人。いかなる人。なんぴと。

　【素性・素姓・▽種姓】→ 人の生まれた家柄や血筋。生まれや育ち。など。

・トホコノリ→瓊矛法

・ツツガ→つつが 【▼恙】 病気などの災難。わずらい。→つつがない 子項目 恙虫・恙虫病

・つつが な・い 【▼恙無い】異常がない。無事である。

・サスラフ→さすら・う さすらふ 【〈流離〉う】目的地を定めず、あてもなく歩きまわる。流浪する。さそらう。

・ヨツワリ→よつ わり 【四つ割り】 四つに割ること。また、四つに割った一つ。四半分。

・ホコロビ→ほころび 【綻び】 ① ほころびること。また、ほころびた所。

・サル→さ・る 【去る・▽避る】なくなす。

原文の現在訳

御旗より　勅使に召す　カンサヒと　コクミ母子と　高天にて　カナサキ問わく　コクミ云ふ　サシメはまこと　わが妻よ　君去りますの　オシテあり　また問ふ汝　何人ぞ　民といふにぞ　雄叫びて　獣に劣る　罪人よ　サシメ捧くる縁故にて　マスヒトとなる　御恵みの　君なり、母よ　祥みれは　君を忘るる　百座と　母も二十座　犯するも　　オシテの恥ち　百と百　姫蔑ろ　五十座と　総て三百七十　天巡り　三百六十度お　瓊矛法　所お去ると　流離ふと　交り去ると　命去る　四つ割り過ぎて　綻びと　ツツガに入れて　ネの国の　シラヒトお召す

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

しばらくして、御旗（宮廷）より勅使があった。そして、トヨケ神の子の八十杵の弟のカンサヒ、コクミ、サシメおよびクラコ姫が高天のしらすに召されたのです。そして、カンサヒとコクミ、母（サシメ）子（クラコ姫）と高天にて尋問を受けました。席上でカナサキが仔細を問わくと、ツ（西の細矛国）のマスヒト（長官）のコクミが云ふ。サシメはまことにわが妻ですよ。このことは、クラギネの君去ります時のオシテの書の中に書いてあります。

また問ふ。汝の生まれた家柄や血筋は何人（いかなる人）ぞと、しらすの席上で聞き取れば、汝（コクミ）とサシメの素性は、昔、君、臣、民に分けたヲシテに照らしても二人は民と云ふになるぞ。そして、コクミの我がままな卑怯さを聞くにつれ、カナサキの臣は呆れて、雄叫び上げて、汝の行為は獣に劣ると言い放ちて、汝は罪人だよと勅りされた。

また、その罪人となる根拠は、己の出性欲のために自らの姉のサシメをクラキネの后に捧くる悪巧みさであった。その縁故にて、地方の長官のマスヒトの座を射止めたこととなる。よって、このご褒美の人事の御恵みによりマスヒトの君となり得たのであった。恥ずかしくないか。

カナサキはサシメに言い放った。母のサシメよ。祥（自分の家系の秩序を乱す行為）を顧みれは、君から受けた恩を忘るるとは情けないことよ。よって、コクミの過ちに百座と、母（サシメ）も過ちに二十座の罪を犯するも、元を辿れば、昔、ネ国のマスヒトのクラキネがコクミを取り締まれなかった行為こそが、アマカミ（天神）の継承を記するオシテ（天成る道）の恥ちとなったぞ。このようにして、二人は百座と百座の罪を犯しながら、クラコ姫の身を蔑ろにしていた。

そのため、二人には、更に五十座の刑が加算されことで、総て三百七十の刑を受けることになった。この刑は、天の巡りの日の出～日の出までの地球が一回転する三百六十度お基準とした刑であり瓊矛法と云うが、その三百六十度を四に分けて、最初の九十度を所お失くし去る刑とし、次の九十度を流離ふの刑とし、また、次の九十度で交りを無くし去る刑と、更に、最後の九十度で天の命を消え去る死刑とした。

だが、悪いことをしたと云って刑を決めるために、三百六十度の刑を決め四つに割り過ぎているとアマキミ（天君）の代が綻びとなるぞ。面倒でもツツガ（刑務所）に入れて、罪に対する反省する期間を設けるべきであるぞ。

７アヤ（紋）１０（2 行）～１５（3 行）【本文】

	ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			ネノクニノ	シラヒトオメス	ネの国の	シラヒトお召す
			タカマニテ	カナサキトワク	高天にて	カナサキ問わく.
			ハハオステ	ツマサルイカン	母お捨て	妻去る如何
１１			コタエイフ	オノレハサラズ	答え云ふ	己は去らず
			ハハヨリゾ	ヰエステイヅル	母よりぞ	家捨て出づる
			ヒメモママ	マタモトオトフ	姫もまま	また原因お問ふ
			コタエイフ	ヨヨノトミユエ	答えいふ	代々の臣故
			コトナセリ	ハハハタミノメ	子となせり	母は民の女
			ススメテゾ	キミノツマナリ	進めてぞ	君の妻なり
			オンメグミ	ナニワスレント	御恵み	何忘れんと
			ヰヰナガス	カンミムスビノ	言い流す	カンミムスビの
１３			シカリテゾ	ナンヂカサリテ	叱りてぞ	汝飾りて
			マドワスヤ	ワレヨクシレリ	惑わすや	われよく知れり
			トモオコヱ	チカラオカシテ	友お越ゑ	力を貸して
			ハハガアゲ	マツリサヅケテ	母があげ	政り授けて
			コトナスオ	ハハニシタエハ	事なすお	母に慕えば
			ヒメガウム	カクサンタメニ	姫がうむ	隠さんために
			ナガシヤリ	タミノメウバヒ	流しやり	民の女奪ひ
			チカラカス	メクミワスルル	力貸す	恵み忘るる
１５			フモモクラ	サルモモモクラ	二百座	去るも百座
			フムガヰソ	ツカムノムソト	踏むが五十座	つかむの六十座と
			ヨモソクラ	コレノカルルヤ	四百十座	これ逃るるや
			コタヱネハ	ツツガニイレテ	答ゑねば	ツツガに入れて

語句の解説

・シラヒト→クラギネの継子となり、ネ国のマスヒト（地方の長官）となる。

・ワスレン→（類似）忘れん坊・・・ 忘れやすい人。忘れっぽい人。わすれんぼ。

・カンミムスビ→第六代タカミムスビのヤソキネのこと。ヤソキネはトヨケの子。・ツツガ→獄舎のこと。

・サズケ→授ける・・① 神仏や上位者が下位の者に与える。② （師が弟子に）伝え教える。伝授する。③ 物を与える。

原文の現在訳

ネの国の　シラヒトお召す　高天にて　カナサキ問わく　母お捨て　妻去る如何　答え云ふ　己は去らず　母よりぞ　家捨て出づる　姫もまま　また原因お問ふ　答え云ふ　代々の臣故　子となせり　母は民の女　進めてぞ　君の妻なり　御恵み　何忘れんと　言い流す　カンミムスビの　叱りてぞ　汝飾りて　惑わすや　われよく知れり　友お越ゑ　力を貸して　母があげ　政り授けて　事なすお　母に慕えば　姫がうむ　隠さんために　流しやり　民の女奪ひ　力貸す　恵み忘るる　二百座　去るも百座　踏むが五十座　つかむの六十座と　四百十座　これ逃るるや　答ゑねば　ツツガに入れて

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

シラヒトはクラギネの継子となり、クラギネが亡くなるとネ国のマスヒト（地方の長官）に就任していた。そのネの国のシラヒトお高天に召すのでした。アマテル神が政務される高天のしらす（現在の法廷）にて、カナサキがシラヒトに問わく。シラヒトの貴方は義理母のサシメおツに捨てたため、クラキネの妻だったサシメはネの国を去ることになった如何。

シラヒト答えて云ふ。シラヒトの己は何処へでも去らず。ツ（西の細矛）に去ることは母より言い出したことぞ。母は家捨てツ（西の細矛）に出づる。姫も母に付いて行くまま。また、カナサキが、サシメ、クラコ姫をツ（西の細矛）のコクミの元に送った原因おシラヒトに問ふ。シラヒト答えて云ふ。クラキネは代々のタカミムスビ家の臣である。故に、クラキネの継子となせり。だが、母は民の出身の女であるが、この縁談はクラキネの強い意思により縁談を進めて来た経緯があるぞ。そして、サシメは君の妻となり得た。

だが、この御恵みをサシメは何に忘れやすいんだろうと言い流す。第五代タカミムスビのトヨケの子であるカンミムスビは、シラヒトの無責任さに叱りて言い放つぞ。汝（シラヒト）の言葉は嘘で飾りて、臣民の多くを惑わすや。われはシラヒトの悪巧みをよく知れり。悪友のシラヒトとコクミは友の絆の範囲お越ゑて、コクミはシラヒトに力を貸して、シラヒトは母があげ、政りをシラヒトに授けて政り事なすお、母のサシメに慕えばクラコ姫が生む。だが、それもこれも民の女を隠さんための行為に、ツ（西の細矛）のコクミの元に流しやるなり。

最悪の行為の元はクラギネであり、民の女を奪ひ示しがつかなくなっていた。その悪行を見抜いていたコクミはクラギネに力貸す。だが、シラヒトはその義理父の恵みも忘るるとは情けない。この罪によりシラヒトの罪は二百座。また、去るも百座。踏むが五十座。つかむの六十座と、合わせて四百十座なり。これよりシラヒトは逃ることができるや。シラヒトが答ゑねぱ、ツツガ（獄舎）に入れて罪を償うことだ。

７アヤ（紋）１５（4 行）～１９（3 行）【本文】

	ヲシテ	カナ文字		現在訳	
		オヲンカミ	モロトハカリテ	大御神	諸神と議りて
		ヤソキネオ	ネノクニカミト	ヤソキネお	ネの国守と
		イサナキノ	ウブヤニオヂト	イサナキの	産屋に叔父と
		オバナレハ	マツリタヱスト	叔母なれば	政絶ゑずと
１７		ミコトノリ	モチテタミタス	勅り	以て民治す、
		オヂトオバ	シラヤマカミソ	叔父と叔母	白山神ぞ
		イサナギハ	マツレトオトノ	イサナギは	祀れど弟の
		クラキネハ	マツラズモチガ	クラキネは	祀らず、モチ(コ)が
		クラヒメオ	カンサヒノコノ	クラ姫お	カンサヒの子の
		アメオシヒ	メアワセスケガ	アメヲツヒ	婚わせ典侍が
		アニトナシ	チチマスヒトノ	兄となし	父マスヒトの
		マツリツグ	シラヒトコクミ	政り継ぐ	シラビト、コクミ
１９		コノイワヒ	ナカバサオヱテ	子の祝ひ	半ば祥を得て
		サスラヒオ	ヒカワニヤルオ	サスラヒお	簸川に遣るお
		マスヒトノ	ワガトミトナス	マスヒトの	わが臣となす

語句の解説

・シラヤマカミ→ワカヒト（後のアマテル神）が生まれた時に、産湯で身体を清められた神。

原文の現在訳

大御神　諸神と議りて　ヤソキネお　ネの国守と　イサナギの　産屋に叔父と　叔母なれば　政絶ゑずと　勅り　以て民治す、　叔父と叔母　白山神ぞ　イサナギは　祀れど弟の　クラキネは　祀らず、モチ(コ)が　クラ姫お　カンサヒの子の　アメヲツヒ　婚わせ典侍が　兄となし　父マスヒトの　政り継ぐ　シラビト、コクミ　子の祝ひ　半ば祥を得て　サスラヒお　簸川に遣るお　マスヒトの　わが臣となす

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

アマテル神の大御神は、諸神と議りて、トヨケ（豊受）神の長男のヤソキネ（八十杵）お、ネ（西の細矛国と東の千足国を合わせた国）の国守と定められた。ヤソキネの国守赴任に当たってアマテル神は、ヤソキネに民を治すための心得を授けられ、政りの基本は子孫繁栄であり、この道をホツマでは天成る道と云うが、「イサナギの産屋に叔父と叔母が立ち会うようになれば、子孫繁栄であり政絶ゑず」と勅りされたのであった。以て、ヤソキネは民を良く治すのであった。その叔父と叔母の名前は、長野の白山神ぞ。そしてイサナキは自ら白山神を祀れど、弟のクラキネは白山神を祀らず。その後、クラキネの子のモチ(コ)がクラキネとサシメの子のクラ姫お、ヤソキネの弟のカンサヒの子のアメヲツヒに婚わせ、スケ（典侍）が兄となし。そして、父（クラキネ）が治めていたネ（西の細矛国と東の千足国）のマスヒトの政り継ぐ。この目出度さにシラビト、コクミはサシメの子のクラ姫を祝ひます。この行為により半ばクラキネより認めて貰ったと思える祥（しるし）を得て、サスラヒ（氏名）お西の細矛国の簸川に遣るお、マスヒトのわが臣となす。

７アヤ（紋）１９（4 行）～２６（1 行）【本文】

	ヲシテ	カナ文字	現在訳
		ソサノオハ　コレトトノヒテ	ソサノオは　これ整ひて
		マナ丰ナル　カミニマフデル	真名井なる　神に詣でる
		ソノナカニ　タオヤメアレバ	その中に　手弱女あれば
		コレオトフ　マカタチコタフ	これを間ふ　マカタチ答ふ
		アカツチガ　ハヤスフヒメト	アカツチが　ハヤスフ姫と
		キコシメシ　キジオトバセテ	聞し召し　急使を飛ばせて
		チチニコフ　アカツチミヤニ	父に請ふ　アカツチ宮に
		トツガント　イエドミヤナク	嫁がんと　云えど宮なく
		オオウチノ　オリオリヤトル	大内宮の　折々宿る
		ネノツボネ　ヱトヤスメトテ	北の局　姉妹休めとて
		ウチミヤノ　トヨヒメメセバ	内宮の　豊姫召せば
		ネノツホネ　サガリナケケバ	北の局　下がり嘆けば
		ソサノオガ　タタヱカネテゾ	ソサノオが　耐かねてぞ
２３		ツルギモチ　ユクオハヤコガ	剣持ち　行くおハヤコが
		オシトトメ　イサオシナラハ	押し留め　功ならば
		アメガシタ　ハナゴキタレバ	天が下　ハナコ来たれば
		ホコカクス　ミヌカホスレド	矛隠す　見ぬ顔すれど
		ウチニツゲ　アルヒタカマノ	中宮に告げ　ある日高天の
.		ミユキアト　モチコハヤコオ	御幸あと　モチコ.ハヤコお
		ウチニメス　ヒニムカツヒメ	内宮に召す　日に向津姫_
		ノタマフハ　ナンチラヱトガ	曰ふは　汝らヱト（姉妹）が
２５		ミケヒエテ　ツクシニヤレハ	御笥飯得て　筑紫に遣れは
		ツグミオレ　タナキネハトル	ツグミ折れ　タナキネは取る
		オハチチニ　メハハハニツク	男は父に　女は母につく
		ミヒメコモ　トモニクタリテ	三姫子も　共に下りて
		ヒタシマセ　カナラスマテヨ	ひたしませ　必ず待てよ

語句の解説

・タオヤメ→たおやめ　【手弱女】　①　やさしい女。しとやかな女。たわやめ。

反語→ますらお　【益荒男】　①　雄々しく強い男。②　浮かれ女。あそびめ。たわれめ。

・オリオリ→おりおり【折折】　一　（名）その時その時。機会がある時ごと。

・ヤトル

ヤトルコタネノ・・・・宿る子種の　4-22

オリオリヤトル・・・・その時、その時（に子種を）宿る　7-21

ヤトルオナカノ・・・・宿る（子種を）お腹の　14-41

・イサオシ→いさお　【功】　国家・民族・社会などに対する功績。手柄。いさおし。

・アメガシタ→あめ が した 【天が下】 「あめのした」に同じ。

ホツマの類似用法、他に、天が下知る（臣、民のことを知る）、天が下照る（国中を照らす）

・ミヌ→見ぬ・・・見たことがないこと。

・ミケヒ→みけ 【御食・御饌】 ① 天皇の食事の料。みけひ（御食飯）⇒古代の弁当

・ミヒメコ（三姫子）

クラキネが益姫モチコは北の典待と、その妹女ハヤコは小益姫、北の内待妃。

ハヤコの子のミヒメコ（三姫子）は、タケコ（沖津島姫）、タキコ（江津島姫）、タナコ（厳島姫）を云う。

称え名	（1）おきつしまひめ	（2）ゑつのしまひ	（3）いつくしまひめ
イミ名	たけこ	たきこ	たなこ
夫	おほなむち后	かぐやまつみ后	いふきとぬし后

【疑問】

7アヤ（綾）の「ソサノオは　これ整ひて　真名井なる」の文章は、何を意味しておりますか。

【疑問に応える】

7アヤ（綾）の「ソサノオは　これ整ひて」の文章は、6アヤ（綾）の「先にオオナムチ（クシキネ）の父親であるハナキネ（花杵、ソサノオ）は、ネの国（鳥取～富山付近にあった国）の細矛（現在の鳥取県）の治（乱れや騒ぎを静ま）らすべし。」を受けた文章である。そして、7アヤ（綾）で、シラヒト、コクミらは、罪人として、ヤソキネらに取り調べを受けた。そして、その罪状は真名井のアマテル神に報告された。なお、8、9、32アヤ（綾）にシラヒト、コクミらの罪状「親も子も犯した」の話が記述されるが、その罪状を後世に伝えて、今の世の戒めの教訓としていたことが察せられる。

原文の現在訳`

ソサノオは　これ整ひて　真名井なる　神に詣でる　その中に　手弱女あれば　これを間ふ　マカタチ答ふ　アカツチが　ハヤスフ姫と　聞し召し　急使を飛ばせて　父に請ふ　アカツチ宮に　嫁がんと　云えど宮なく　大内宮の　折々宿る　北の局　姉妹休めとて　内宮の　豊姫召せば　北の局　下がり嘆けば　ソサノオが　耐かねてぞ　剣持ち　行くおハヤコが　押し留め　功ならば　天が下　ハナコ来たれぱ　矛隠す　見ぬ顔すれど　内宮に告げ　ある日高天の　御幸あと　モチコ.ハヤコお　中宮に召す　日に向津姫_　曰ふは　汝らユト（姉妹）が　御食飯得て　筑紫に遣れは　ツグミ折れ　タナキネは取る　男は父に　女は母につく　.三姫子も　共に下りて　ひたしませ　必ず待てよ

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

6アヤ（綾）にて、ソサノオはアマテル神より「先にオオナムチ（クシキネ）の父親であるハナキネ（花杵、ソサノオ）は、ネの国（鳥取～富山付近にあった国）の細矛（現在の鳥取県）の治（乱れや騒ぎを静ま）らすべし。」と勅りされており、ソサノオらの活躍により細矛国を静かになるように治めた。そして、罪人となったシラヒト、コクミらは、ヤソキネらに取り調べられ「シラヒトコクミの事件」は終息した。この甲斐あって、ソサノオは、これネの国を治め整ひて、その征伐の報告をアマテル神にするため真名井なる。

そして、ソサノオはアマテル神に詣でる。その大内宮の中に手弱女（やさしい女、しとやかな女）あれば、ソサノオの

お妃に誰が良いかとこれを問ふ。マカタチ（人名）が答ふ。お妃にはアカツチが子のハヤスフ姫が良いのではとお聞したので、その旨アマテル神に召し。その確認のためにキジ（使者）を飛ばせて、父のアカツチに請ふ。アカツチが述べるには、ソサノオが住む宮に嫁がんと云えど、ソサノオには宮もなくてどうするの。

アマテル神がお住まいになられる大内宮の后は、折々（その時その時）に子種を宿る。だが、北の局の姉妹は少しの間、身体を休めと云われても内宮の豊姫を召せば、北の局はアマテル神が疎まれたと勘違いし下がるなり。そして気落ちした北の局が嘆けば、そのことを知ったソサノオが北の局の心情を思い図って嘆けば、遂に、耐かねて行動に走るぞ。剣持ちアマテル神の所に行くお、クラキネの妹女のハヤコがソサノオを押し留めた。

そして、ハヤコはソサノオの技量を量った。もし、ソサノオに功（思いやりをもって扱う）気持ちがあるならば、きっと、天が下（臣、民の心がわかる筈だ）。だが、ソサノオは、サクラウチが女の若姫ハナコ来たれば手にしていた矛を背中に隠す。そして、ソサノオはハナコの姿を見ぬふりする顔をすれど、ソサノオの矛に危険を感じたハナコは、内宮（アマテル神）にソサノオの素行の悪さを告げるのであった。

ある日、高天（アマテル神を指す）の（に）御幸あと、クラキネの子の姉モチコ、妹のハヤコお、アマテル神は中宮に召されたのです。日（アマテル神）に仕えられる向津姫が曰ふは、汝らヱト（姉妹）が御食飯（古代の日当、弁当の意）得て、二人をアマテル神の使いとして筑紫に遣れは、筑紫のツグミが折れて、タナキネは嫁を妻（メ）取る。男は父に、女は母につく。ハヤコの子の三姫子（タケコ（沖津島姫）、タキコ（江津島姫）、タナコ（厳島姫））も共に下りて、ひた（養育）しませ、必ず待てよ。

７アヤ（紋）２６（2 行）～３３（4 行）【本文】

	ヲシテ	カナ文字		現在訳	
		トキアリト	ムヘネンコロニ	時ありと	むべ懇ろに
		サトサレテ	ツクシアカヅチ	諭されて	筑紫アカヅチ
		コレオウケ	ウサノミヤヰオ	これを受け	宇佐の宮居を
２７		アラタメテ	モチコハヤコハ	改めて	モチコ.ハヤコは
		アラツホネ	オケバイカリテ	新局	置けば怒りて
		ヒタシセズ	ウチニツクレバ	養育しせず	中宮に告ぐれば
		トヨヒメニ	ヒタシマツラシ	豊姫に	養育しまつらし
		サスラナス	フタサスラヒメ	流離なす	二さすら姫
		イキドホリ	ヒカハニイタリ	憤り	簸川にいたり
		ナルオロチ	ヨニワタカマリ	なるヲロチ	世に蟠り
		コクミラモ	ツカエテシムオ	コクミらも	仕えて血脈お
２９		ウバイハム	ソサオノシワザ	奪い喰む	ソサオの仕業
		アヂキナク	ノシロシキマキ	味気なく	ノ（苗）代重播き
		アオハナチ	ミノラズミゾノ	アお放ち	実らずミゾ（御稲）の

		ニイナメノ	カンミハオレハ	新嘗の	神衣織れは
		トオケガス	コレタタサレテ	ト（瓊）お汚す	これ糺されて
		ソサノオガ	ヒトリカフムル	ソサノオが	一人かふむる
		キンハトノ	トヅレバイカル	キンハ殿	閉づれば怒る
		ブチコマオ	キラカウガチテ	斑駒お	甍穿ちて
31		ナゲイルル	ハナコオドロキ	投げ入るる	ハナコ驚き←コ←ご
		ヒニヤフレ	カミサリマスト	ひに破れ	神去りますと
		ナクコエニ	キミイカリマシ	泣く声に	君怒りまし
		ソサノオニ	ナンヂキタナク	ソサノオに	汝汚く
		クニノゾム	ミチナスウタニ	国望む	道なす歌に
		アメガシタ	ヤワシテメクル	天が下	和して巡る
		ヒツキコソ	ハレテアカルキ	日月こそ	晴れて明るき
		タミノタラナリ		民のタラ（親）なり	
33		ソサノオハ	イワオケチラシ	ソサノオ	岩お蹴散らし
		ナオイカル	キミオソレマシ	なお怒る	君恐れまし
		イワムロニ	イレテトサセバ	岩室に	入りて閉させば
		アメガシタ	カガモアヤナシ	天が下	光影も彩なし

語句の解説

・トキアリ→① 時節が到来する。② 好機に合う。栄える。時にあう。

・ムベ→むべ 【▽宜】 （副）「うべ（宜）」に同じ。

うべ 【▽宜】 （副）あとに述べる事柄を、当然だ、なるほどと得心したりするさまを表す。本当に。もっともなことに。なるほど。「今つくる久邇の都は山河のさやけきみれば一知らすらし／万葉集 一〇三七」〔中古以降「むべ」と書かれることが多い〕→むべ句 宜し・宜しこそ・宜なり

・ネンゴロ 【懇ろ】→（形動）文 ナリ ① 心のこもっているさま。手厚いさま。② 親しいさま。特に、男女がなれ親しむさま。③ 程度がはなはだしいさま。度を超しているさま。

（名）スル① 親密になること。親しく付き合うこと。② 男女が深い仲になること。③ 男色関係をもつこと。

・サトス 【諭す】→ 目下の者に、ことの道理を理解できるように言いきかせる。

・マツラシ→まつ・る 【祭る・▼祀る】

① 飲食物などを供えたりして儀式を行い、神を招き、慰めたり祈願したりする。② 神としてあがめ、一定の場所に安置する。③ あがめて上位にすえる。まつりあげる。

・サスラ→さすらう、【〈流離〉う】 一 目的地を定めず、あてもなく歩きまわる。流浪する。さそらう。

・ノシロ→ノシロは、大辞林の辞書にない。

なわしろ 【苗代】 稲の種をまいて苗を育てる所。苗代田。田植えが機械化された現在は育苗箱が多く用いられる。

・シキマキ→しき まき 【▽重▼播き】穀物の種を一度まいた上に重ねてまき、穀物の生長を害することかという。

・ニイナメ→しん じょう　【新▼嘗】　〔「しんしょう」とも〕秋に、その年に新しく取れた穀物を神に供えて神をまつり、

天皇みずからも新穀を食すること。にいなめ。子項目 新嘗会・新嘗祭

・ブチコマ→種々の毛色がまじる馬。

・ヰラカ→いらか　【▼甍】　①　屋根の大棟。棟瓦。　②　瓦葺きの屋根。また、葺いた瓦。③　切妻屋根の三角形の部分。

・ウガチ→うがち　【▼穿ち】　①　穴をあけること。　②　人の気づかない真相を探り出してみせること。また、人情の機微

などを巧みに指摘してみせること。また、そのような事柄。③　新奇で凝った趣向。④　遊女の意地っ張りであること。

・アヤナシ→あや な・し　【▽文無し】　（形ク）〔「文」は物事の筋目の意〕①　筋道が立たない。条理のない。理不尽だ。

②かいがない。むだだ。③　物の判別がつかない。はっきりしない。

・アオハナチ→アが、意味不明。但し、ハナチにつながる他の語句の事例は、アオは「青」の文字が正しい。

・ヰンハトノ→ヰンが、意味不明。ヰンハトノの「ン」を抜くと、ヰハトノ、岩殿になる。

・ヒニヤフレ→ヒが、意味不明。ヒは日にすると、日に被れとなるが意味不明。

原文の現在訳

時ありと　むべ懇ろに　諭されて　筑紫アカヅチ　これを受け　宇佐の宮居を　改めて　モチコ.ハヤコは　新局　置けば怒りて　養育しせず　中宮に告ぐれば　豊姫に　養育しまつらし　流離なす　二さすら姫　憤り　簸川に至り　なるヲロチ　世にわだかまり　コクミらも　仕えて血脈お　奪い喰む　ソサオの仕業　味気なく　ノ（苗）代重播き　アオ放ち　実らずミゾ（御稲）の　新嘗の　神衣織れは　ト（瓊）お汚す　これ糾されて　ソサノオが　一人かふむる　ヰンハ殿　閉づれば怒る　斑駒お　甍穿ちて　投げ入るる　ハナコ驚き　ひに破れ　神去りますと　泣く声に　君怒りまし　ソサノオに　汝汚く　国望む　道なす歌に　天が下　和して巡る　日月こそ　晴れて明るき　民のタラ（親）なり　ソサノオ　岩お蹴散らし　なお怒る　君恐れまし　岩室に　入りて閉させば　天が下　光影も彩なし

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

時あり（時節が到来する）と、むべ（本当に）懇ろ（手厚く）に諭されて、筑紫宮のアカヅチ命はこれ（三姫子を養育する申し出を）を受けられ、宇佐の宮居を改められて新たにな宮を置かれた。その新たな宮に、クラキネが益姫モチコ、モチコの妹女ハヤコには新局を与えて置けば、モチコ、ハヤコは怒りて子守の役目でないとアマテル神の御子の三姫子を養育（ヒタ）しせず。このことを中宮の向津姫に告ぐれば、向津姫は豊姫に養育し神としてあがめまつらしと申されたのであった。そして、養育を放棄したモチコ、ハヤコは、流離（目的地を定めず、あてもなく歩きまわる）なす。モチコ、ハヤコの二人のさすら姫は、憤りて出雲の簸川に至り。そのモチコ、ハヤコの怨念が成長してなるヲロチ。ヲロチとは世にわだかまりの怨念の固まりが原因であった。コクミらもヲロチに仕えて血脈お奪い喰む。そのヲロチになる元の根源は、ソサオの仕業であり行いが粗暴で心が味気なく、一度、種を蒔いたノ（苗）代に、更に、重播き（二重播き）のア（過ち）お放ちていた。そのことで、一度目の穀物の生長を二度目の穀物の発芽により栄養分が取られる等して、一度目の穀物の生長が遅れ、稲は秋になっても一度目の穀物が実らず（なかった）。

その年もミゾ（御稲）の新嘗の祭を行うことになっていたが、神衣の着物を織ればソサノオはト（瓊）お汚す。そして、スサノヲの悪行のこれ糾されて、ソサノオが一人責任をかふむるなり。そして、アマテル神がヰンハ殿を閉づればソサノ

オが怒る。また、種々の毛色がまじる斑駒の馬お、甍（屋根の大棟）に穿ち（穴をあける）て斑駒の馬を投げ入るる。この悪行にハナコ驚きてヒに破れ神去りますと、泣く声にアマテネ神の君が怒りまし。そして、アマテル神がソサノオに申すには、「汝の行いは汚くて反省しなくてはいけない。君もアマカミ（天神）の位になる時は、国が治まることを真っ先に望むだろう。」そして、アマテル神は、天御祖神より伝わる天成る道のなす歌をスサノヲに聞かせられるように「天が下（空の下、日本中）、和して巡る日月こそ、晴れて明るき民のタラ（親）なり。」と歌い上げられた。だが、ソサノオにはアマテル神の意思が通じず、岩お蹴散らしてなお怒る。アマテル神の君は、とうと恐れまし。そして、冷静さをなくされたアマテル神は岩室に入りて自ら岩戸を閉させば、天が下（空の下、日本中）、光も影も輝きの彩もなし。（なくなった。）

７アヤ（紋）３４（１行）～３９（４行）【本文】

	ヲシテ	カナ文字	現在訳	
		ヤスガハノ　ヤミニオドロク	安河の	闇に驚く
		オモイカネ　タビマツニハセ	オモイカネ	タビマツに馳せ
		コニトイテ　タカマニハカリ	子に問いて	高天に諮り
		斗ノランヤ　ツハモノヌシガ	祈らんや	ツハモノヌシが
３５		マサカキノ　カンヱハニタマ	マサカキの	上枝はニタマ（瓊玉）
		ナカツヱニ　マフツノカガミ	中つ枝に	真経津の鏡
		シモニキテ　カケ斗ノラント	下、和幣	懸け祈らんと
		ウスメラニ　ヒカゲオタスキ	ウスメらに	日影お襷
		チマキホコ　オケラオニハビ	茅巻き矛	朮お庭火
		ササユハナ　カンクラノトノ	笹湯花	神楽の殿
		カンカガリ　フカクハカリテ	神篝火	深く謀りて
		オモイカネ　トコヨノオトリ	オモイカネ	常世の踊り
３７		ナガサキヤ　ワザオキウタフ	長幸や	ワザオキ歌ふ,
		カクノキ　カレテモニホユ	香久の木	枯れても匂ゆ
		シホレテモヨヤ　アガツマ	萎れても良や	吾が妻
		アワ　アガツマアワヤ　シホ	あわ　吾が妻あわや	萎
		レテモヨヤ　アガツマ　アワ	れても良や	吾が妻　あわ
		モロカミハ　イハトノマエニ	諸神は	岩戸の前に
		カシマドリ　コレゾトコヨノ	鹿島鶏	これぞ常世の
		ナガサキヤ　キミヱミホソク	長幸や	君笑み細く-
３９		ウカカエハ　イハトオアグル	伺えば	岩戸を投ぐる
		タチカラオ　ミテトリイダシ	タチカラオ	御手取り出し
		タテマツル　ツハモノヌシガ	奉る	ツハモノヌシが
		シメナワニ　ナカエリマシソ	注連縄に	な帰りましそ

【疑問】

７アヤ（綾）の「安河の闇に驚く」の安河は、現在の地でどこになるでしょうか。

【疑問に応える】

ホツマツタヱの文中に出てくる安河の語句は、「ヤスガワ」、「ヤスガハ」、「ヤスカワ」がある。そこで、各アヤ（綾）の文脈から見ると、「ヤスカワ」は各地にあったことになる。具体的には、

6 アヤ（綾）の「ヤスガワ」は、現関西地方のヤマトにあったと思われる。

7 アヤ（綾）の「ヤスガハ」は、高天での出来事と思われ当時の都は伊勢の伊雑宮であり伊勢地方にあったと思われる。

9 アヤ（綾）の「ヤスカワ」は、イナタヒメ、オオヤヒコより出雲地方にあったと思われる。

28 アヤ（綾）の「ヤスガハ」は、「ヒタカミヤスノマツリコト」より「ニシハヤスガハ」は伊勢地方を指すと思われる。

各アヤ（綾）の抜粋

6 アヤ（綾）34　ヤスガワ

アヒワカミヤニ　トトマリテ　ヤミオタシマス　タガノカミ　ヤマトヤスミヤ　ヒキウツシ

アメヤスガワノ　ヒルコヒメ　ミコオシヒトオ　ヒタシマス

7 アヤ（綾）33　ヤスガハ

ソサノオハ　イワオケチラシ　ナオイカル　キミオソレマシ　イワムロニ　イレテトサセバ

アメガシタ　カガモアヤナシ　ヤスガハノ　ヤミニオドロク

9 アヤ（綾）11　ヤスカワ

ツルギアリ　ハハムラクモノ　ナニシアフ　イナタヒメシテ　オオヤヒコ　ウメハソサノオ

ヤスカワニ　ユキテチカヒノ　オノコウム

28 アヤ（綾）16　ヤスガハ

ツキノミヤ　セオリツヒメオ　ミキサキト　アメニオサメテ　オオヤマト　ヒタカミヤスノ

マツリコト　キコセハタミモ　オタヤカニ　フソヰヨロトシ　アメヒツギ　ミコノオシヒト

ユヅリウケ　モトノタカヒニ　シロシメス　ニシハヤスガハ　オモイカネ

語句の解説

・マフツノカガミ→まふつ の かがみ 【真▽経津の鏡】① 鏡の美称。② 八咫鏡の別名。〔紀 神代上訓注〕

・ニキテ→にき て 【▽和▽幣】 〔後世「にぎて」とも〕麻などの繊維で織った、神にささげるための布。

・タスキ→たすき 【▼襷】 ①肩からわきの下にかけて結び回し、背中で斜めに打ち違いにする。

・オケラ→おけら をけら 【▼朮】 キク科の多年草。山野の乾燥地に自生。高さ五〇センチメートル 内外。葉は互生し、縁には剛毛がありかたい。秋、淡紫色または白色の鐘形の頭状花をつける。若苗を食用にする。根茎を干したものを蒼朮・白朮といって、利尿・健胃薬とし、正月の屠蘇にも入れる。邪気をはらう力があるとされた。ウケラ。

・ニハビ→にわ び には一 【庭火】 庭でたく火。特に、宮中で神事が行われる際に庭でたかれる篝火（かがりひ）。

・ヒカゲ→ひ かげ 【日陰・日▼蔭】 ① 物のかげになって日光の当たらない場所。③ ヒカゲノカズラの略。

・ササユ→ささ ゆ 【▼笹湯・】 ① 巫女が口寄せをする際、熱湯に笹の葉を浸して、自分の身にふりかけ祈禱すること。

・トコヨ→とこ よ 【常世】① 永久に変わらない・こと（さま）。

・シホレテ→しお・れる しをれる 【▽萎れる】① 草木や花が、水分が不足したりして生気を失う。枯れそうになる。

・シメナワ→しめ なわ 一なは 【〈注連〉縄・】 境界を示し出入りを禁止することを示すために張りまわす縄。

原文の現在訳

安河の　闇に驚く　オモイカネ　タビマツ（手火松）に馳せ　子に問いて　高天に諮り　祈らんや　ツハモノヌシが　マサカキの　上枝はニタマ（瓊玉）　中つ枝に　真経津の鏡　下、和幣　懸け祈らんと　ウスメらに　日影お襷　茅巻き矛　朮お庭火　　笹湯花　神楽の殿　神篝火　深く謀りて　オモイカネ　常世の踊り　長幸や　ワザオキ歌ふ　香久の木枯れても匂ゆ　萎れても良や　吾が妻　あわ　吾が妻あわや　萎　れても良や　吾が妻　あわ　諸神は　岩戸の前に　鹿島鶏　これぞ常世の　長幸や　君笑み細く　伺えば　岩戸を投ぐる　タチカラオ　御手取り出し　奉る　ツハモノヌシが　注連縄に　な帰りましそ

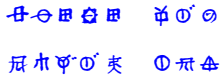
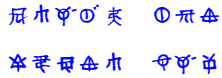
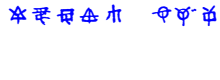
解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

伊勢の国に存在した安河の地の闇に驚くアマテル神の臣のオモイカネ（思兼）は、タビマツ（手火松）の明かりを持っ（て）に馳せ参じた我が子のタチカラオ（シツヒコ、戸隠神こと）に問いていた。更に、今回の安河の闇を解決するため、高天に諸神を集めて事を諮りされ、天地に明かりを灯すことを祈らん（祈ろうよ）やと問われた。そして、天児屋根の親のツハモノヌシ（春日殿）が奉納したマサカキの飾りを、上枝にはニタマ（瓊玉）を、中つ枝の飾りに真経津の鏡（八咫鏡の別名）を、更に、下枝には神にささげるための布ので出来た和幣を懸けて祈らん（祈ろうお）と謂われた。

また、ウスメらに日影のかずらお襷掛けにさせられるや、お祝いの進物の茅巻きを神に捧げ、また、矛とオケラ（朮）の草お庭に積み、神事の篝火を焚かれて邪気を祓われた。また、ウスメらに熱湯に笹の葉を浸して自分の身にふりかけ祈禱用の笹湯の花を持たせて、神楽の殿の前で神篝火を焚かれて深く神謀りされて、オモイカネ（ワカヒコ、昼子の夫）らは、常世の踊りを促して、そして、祝詞の長幸やワザオキ（俳優）歌ふ　「香久の木枯れても匂ゆ、また、しほれ（萎れ）ても良や　吾が妻　あわ　吾が妻あわや　しほれても良や　吾が妻　あわ」と唱和しながら、諸神は岩戸の前に踊り出て鹿島鶏の踊りを、賑やかに舞い続けられたのであった。

すると、その唱和の音を聞き、賑やかな踊りの舞を覗き見されていたアマテル神は、「これぞ常世の　長幸や」と君笑みされた。そこで、オモイカネが小さな声で細く伺えば、アマテル神が小さく頷かれた。その瞬間、タチカラオは間を置かず岩戸を開けて投ぐる。更に、タチカラオがアマテル神の御手を取り出し奉る。そして、この瞬間が安河の地の闇が終わった時でもあり、アマテル神が岩戸に引き返されないように、急ぎツハモノヌシが注連縄を岩戸の前に張られたのであった。その様子を注視されたアマテル神は、なにを今更、岩戸帰りましょうそと謂われた。その言葉を聞いた諸神らは、皆が安堵されたのであった。

７アヤ（紋）４０（1 行）～４２（3 行）【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳	
	シカルノチ　タカマニハカリ	然る後	高天に諮り
	ソサノオノ　トガハチクラノ	ソサノオの	トガは千座の
	ミキダガレ　カミヌキヒトツ	三段枯れ	髪抜き一つ
	ツメモヌキ　マダトトカネバ	爪も抜き	まだ届かねば

４１		コロストキ	ムカツヒメヨリ	殺す時	向津姫より
		サオシカニ	ウケモノイノリ	サオシカに	ウケモノ祈り
		ヨミカエス	ハナゴノヨモサ	蘇す	ハナゴの四百祥
		ツクノエハ	サガオアカセヨ	償えば	サガを明せよ
		ソサノオガ	シワザハシムノ	ソサノオが	仕業はシムの
		ムシナレド	サガナクツツガ	虫なれど	サガ無くつつが（恙）
		ナカランヤワヤ		無からんやわや	

語句の解説

・シカルノチ→しかる のち 【▽然る後】 （接続）そうしてから。そのあとで。

・トガ→とが 【▼咎・▽科】 ① 人からとがめられるような行為。あやまち。 ② 罰されるべきおこない。つみ。

・キダ→きだ 【▽段・▽常】一 （名）① 布の長さを測る単位。一常は一丈三尺。② 田畑の面積を測る単位。たん（段）。二 （接尾）助数詞。切れめを数えるのに用いる。

・チクラ→ち くら 【千▽座】 多くの台。 子項目 千座の置き戸

ち くらの おきど 【千▽座の置き戸】 上代、祓のとき、罪の償いとして出した多くの品物。

「速須佐之男命に一を負ほせ／古事記 上訓」 親項目 千座

・ガレ→がれ 山の斜面がくずれて、岩石がごろごろしている所。がれ場。

・ヨミカエス→よみ がえ・る 【▼蘇る・▼甦る】① 死んだ人、死にかけた人が、息を吹き返す。生き返る。蘇生する。

・サガ→さが 【▽祥・〈前兆〉】 〔「性」と同源〕しるし。きざし。

さが 【▽性】 ① 生まれつきの性質。もって生まれた性分。持ち前。② ならわし。ならい。習慣。

・ツツガ→つつが 【▼恙】 病気などの災難。わずらい。→つつがない

・ヤワヤ→やわ やわ 【柔柔】 一 （副）① いかにもやわらかなさま。② 物腰のやわらかなさま。しなやかなさま。

・ナカラン→無からん→無いに違いない。

原文の現在訳

然る後 高天に諮り ソサノオの トガは千座の 三段枯れ 髪抜き一つ 爪も抜き まだ届かねば 殺す時 向津姫より サオシカに ウケモノ祈り 蘇す ハナコの四百サ（祥） 償えば サガを明せよ ソサノオが 仕業はシムの 虫なれど サガ無くつつが（恙） 無からんやわや

解説文 （赤文字は、原文の現在訳です。）

然る後（ある時期を見て）、オモイカネは、伊雑宮の高天にソサノオの仕業をお諮りされた。その裁断結果は、ソサノオのトガ（罪）は、最高刑の千座の三段枯れ（三段に分けて執行）に当たると告げられ、髪抜き一つ、爪も抜き、まだ届かねば殺す。その刑が執行された時のことである。アマテル神の妃の向津姫は慈悲心によりソサノオを助けるべく、サオシカ（勅使）が向津姫に呼ばれた。呼ばれたのは祈祷師であり、名はウケモノと言い、ウケモノがお祈りすると、死んだ人、死にかけた人が息を吹き返し蘇す。そして、サクラウチが女の若姫ハナコの四百サ（サガ・祥）を償えば、もって生まれた性分と言うサガ（性、祥）を明せよとオモイカネが申されのでした。そのソサノオが仕業は、シム（血筋）の虫なれどサガ（生まれた性分）は無く、病気などの災難と言うつつがも無からん（多分、無いに違いない）やわや。

７アヤ（紋）４２（4 行）～５３（1 行）【本文】

	ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			コトノリオ	モヨガハカリテ	勅りお	諸神が議りて
４３			アメモトル	オモキモシムノ	天、悖る	重きもシム（血縁）の
			ナカバヘリ	マシワリサルト	半ば減り	交わり去ると
			スガサアオ	ヤヱハ丰モトム	す笠、青	八重這ゐ求む
			シタタミノ	サスラヤライキ	下民の	流離やらいき
			オヲンカミ	シロシメサレハ	大御神	知し召されば
			アマテラス	ヒトノオモテモ	天照らす	人の面も
			タノシムニ	ミチスケノウタ	楽しむに	ミチスケの歌
			アハレ	アナオモシロ	天晴れ	あなおもしろ
４５			アナタノシ	アナサヤケ	あな楽し	あなさやけ
			オケ	サヤケオケ	おけ	さやけおけ
			アワレ	オモシロ	あわれ	おもしろ
			サヤケオケ	アナタノシ	さやけおけ	あな楽し
			アヒトモニ	テオウチノベテ	相共に	手お打ちのべて
			ウタヒマフ	チハヤフルトゾ	歌ひ舞ふ	千早振るとぞ
:			タノシメハ	コレカンクラニ	楽しめば	これ神楽に
			アマテラス	オヲンカミナリ	天照	大御神なり
４７			サスラオハ	ミコトオウケテ	サスラオは	勅お受けて
			ネニユカン	アネニマミエル	ネに行かん	姉にまみえる
			シバシトテ	ユルセハノボル	暫しとて	許せぱのぼる
			ヤスカハベ	フミトトロキテ	安河辺	踏みととろきて
			ナリウコク	アネハモトヨリ	鳴り動く	姉はもとより
			サスラオガ	アルルオシレハ	サスラオが	荒るるお知れば
			オトロキテ	オトトノクルハ	驚きて	弟の来るは
			サハアラジ	クニウバフラン	さはあらじ	国奪ふらん
４９			カゾイロノ	ヨザシノクニオ	かぞいろ（父母）の	ヨザシの国お
			ステオレハ	アヱウカガフト	捨ておれば	アヱ（饗）、窺ふと

	⊙ホ中ホ开	母△母回ヤ①隶	アゲマキシ	モスソオツカネ	アゲマキ（総角）し	裳裾お束ね
	⑩①中ゆ开	兵⊙井开△中尖	ハカマトシ	丰モニミスマル	袴とし	五百に御統
	①ム中ホ米	爪田丸兵中田丸	カラマキテ	チノリ丰モノリ	から巻きて	千入り、五百入り
	爪爪井ヤホ	占⑩占回△丸米	ヒチニツケ	ユハズオフリテ	肘に着け	ゆはずお振りて
	ヤ臭爪母爪	①爪井多△ヌ米	ツロギモチ	カタニワフンテ	剣持ち	堅庭踏んで
	ホ爪ム开米	凡ヤ田回爪ホ井	ケチラシテ	イツノオタケニ	蹴散らして	厳の雄叫に
51	⊕开丸ゆ△	母○田⊙凡多△	ナジリトフ	ソサノオイワフ	なじり問ふ	ソサノオ曰く
	⊕回母夷母	女①开隶田尸井	ナオソレソ	ムカシネノクニ	な恐れそ	むかしネの国
	占ホゆ⊙丸	⊙隶ゆ中爪壬米	ユケトアリ	アネトマミヱテ	行けとあり	姉とまみえて
	田爪占①ヌ	⑩尖①井尸夷◎	ノチユカン	ハルカニクレバ	後行かん	遥かに来れば
	△爪◎多米	凡ヤ①壬开中ま	ウタガワデ	イツカヱシマセ	疑わで	厳返しませ
	◎隶ゆ多尸	○回ミ臭⊘⊕井	アネトワク	サココロハナニ	姉問わく	サココロは何
	母田回爪ヨ	隶井凡爪尖田爪	ソノコタエ	ネニイタルノチ	その答え	ネにいたる後
	回回△中ヌ	巫⊕ム⊘ホ◎夷	コオウマン	メナラハケガレ	子を生まん	女ならば穢れ
53	✿⊘ホ丑尸	回夷爪①凡⊕丸	オハキヨク	コレチカイナリ	男は清く	これ誓いなり

語句の解説

・モトル→もと・る 【▼悖る】① 物事の筋道にあわない。道理にそむく。反する。

・マシワリ→まじわり 【交わり】 ① つき合うこと。交際。② 男女のちぎり。性交。

・スガサ→すげ - がさ【×菅×笠】スゲの葉で編んだ笠。すががさ。《季 夏》（goo 辞書）

・ウカガフ→うかがふ 【▼窺う】① 気づかれないように物陰や隙間から様子を見る② 相手の反応を気にして様子をみる。

・カゾイロ→かぞ いろ 【▽父▽母】 「かぞいろは」に同じ。

　かぞ いろは 【▽父▽母】 〔「いろは」は母の意。古くは「かそいろは」〕父母。両親。かぞいろ。

・ヤヱ→や え 一へ 【八重】 ① 八つ重なっていること。 ② いくつも重なっていること。

・サスラ→さすら・う さすらふ 【〈流離〉う】目的地を定めず、あてもなく歩きまわる。流浪する。さそらう。

・メサレ→めさ・れる 【召される】① 「する」の尊敬語。なさる。めさる。②…なさる。

・シロシ→し・る 【知る・▽領る】《知》① それについての知識を有する。わきまえる。気がつく。わかる。

・オモテ→おもて 【面】 ① かお。顔面。 ② ものの表面。③ 能などの面。仮面。 ④ 面目。体面。

・アワレ→あわれ あはれ 【哀れ】① 同情しないではいられない・こと（さま）。はやしことば。

・アハレ→あっぱれ 【▽天晴（れ）】 人の行為がとてもすぐれていて、賞賛に値するさま。みごとだ。感心だ。

・サヤケ→さや け・し 【▽明けし】 ）① 気候はさわやかで大気は清澄、万物は見た目にもはっきりしている。清い。

・オケ→囃子詞→唄の掛け声の部分。唄の調子を整えたり、唄をひきたてたりするために歌詞に添えられる。

・チハヤフル→ち はやぶる 【千早振る】巫女のたすき布の乱舞いなる。

・カンクラ→後の神楽→① 神をまつるために奏する歌舞。

・マミエル→ま み・える 【▽見える】① 「会う」の意の謙譲語。お目にかかる。② 顔を合わせる。対面する。

・シバシ→しばし 【▽暫し】 （副）ある行動や状態をわずかな間中断するさま。ちょっとの間。しばらく。

・トドロキ→とどろき 【▼轟き】 とどろくこと。

とどろ・く 【▼轟く】 ① 大きな音が鳴りひびく。鳴動する。③ 驚く。また、驚いて胸がどきどきする。

・サハ→さ は 【▽然は】「さ（然）」に助詞「は」の付いたもの〕そのようには。そうは。さようには。

・アラジ→なおあら・じ このままで済ますわけにいかない。ただでは済まされない。

・ヨザシ→寄・任（読み）よさし.〖名〗委任なさること。また、委任なさった役目

・アヱ→あえ あへ 【▼饗】 御馳走。饗応。もてなし。

・ウカガウ→表記 うかがう（伺・▼窺）

「伺う」は「聞く・尋ねる・訪問する」のへりくだった言い方。

「窺う」は〝のぞいてみる。そっと様子を見る。機会をねらう〞の意。

・アゲマキ→あげ まき 【〈総角〉・揚巻】 ① 古代の少年の髪形。頭髪を中央から二分し、耳の上で輪の形に束ね、二本の角のように結ったもの。また、その髪形の少年。角髪。

・モスソ→も すそ 【▼裳裾】 裳のすそ。着物のすそ。

・ミスマル→み すまる 【▽御▽統】古代の装身具。沢山の珠を糸に貫いて環状とし、首などにかけて飾りとしたもの。

・カラマキ→から まきぞめ 【▽絡巻き染（め）】 〔糸をからめまいて染めた意とも、〕絞り染め。

・チノリ→ち のり 【千▽入り・千▼箭】千本の矢が納められていること。また、たくさんの矢が差し入れてあること。

・ヒチ→ひじ ひぢ 【肘・▼肱・▼臂】 ① 上腕と前腕とをつなぐ関節。また、その折り曲げたときの外側の部分。

・ユハズ→ゆ はず 【▽弓▼筈】 「ゆみはず（弓筈）」に同じ。ゆみ はず 【弓▼筈】 弓の両端の、弦をかけるところ。

・ケチラシ→け ちら・す 【蹴散らす】① かたまっているものを、足でけって散乱させる。② 敵などを追い散らす。

・イツ→いつ 【▽厳・〈稜威〉】 ① 神聖であること。斎み清められていること。② 勢いの激しいこと。威力が強いこと。

・ナジリ→なじ・る 【▽詰る】 よくない点や不満な点などを問いただして責める。詰問する。

・ハルカ→はる か 【▼遥か】気持ちが進まないさま。

・ウタガワデ→うたがわし【疑わしい】物事が疑いたくなるようなさまであることを表す。不審だ。

原文の現在訳

勅りお　諸神が議りて　天、悖る　重きもシム（血縁）の　半ば減り　交わり去ると　す笠、青　八重這ゐ求む　下民の　流離やらいき　大御神　知し召されば　天照らす　人の面も　樂しむに　ミチスケの歌　天晴れ　あなおもしろ　あな楽し　あなさやけ　おけ　さやけおけ　あわれ　おもしろ　さやけおけ　あな楽し　相共に　手お打ちのべて　歌ひ舞ふ　千早振るとぞ　楽しめば　これ神楽に　天照　大御神なり　サスラオは　勅お受けて　ネに行かん　姉にまみえる暫しとて　許せぱのぼる　安河辺　踏みととろきて　鳴り動く　姉はもとより　サスラオが　荒るるお知れば　驚きて弟の来るは　さはあらじ　国奪ふらん　かぞいろ（父母）の　ヨザシの国お　捨ておれば　饗、窺ふと　アゲマキ（総角）し　裳裾お束ね　袴とし　五百に御統　から巻きて　千入り、五百入り　肘に着け　ゆはずお振りて　剣持ち　堅庭踏んで　蹴散らして　厳の雄叫に　なじり問ふ　ソサノオ曰く　な恐れそ　むかしネの国　行けとあり　姉とまみえて後行かん　遥かに来れば　疑わで　厳返しませ　姉問わく　サココロは何　その答え　ネにいたる後　子を生まん　女ならば穢れ　男は清く　これ誓いなり

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

オモイカネの勅りお諸神が議りて、その議決は天に悖る（道理にそむく）との結果であった。そのソサノオの仕業の重きもシム（血縁）が原因であると裁定されるとなると罪の量刑も半ばに減らされるなり。この結果を聞いた皆も安堵され

たのであった。そして、ソサノオは男女の不埒な交わりも捨て高天を去ることになると、ソサノオのその姿はスゲの葉で編んだ笠、青色の衣を身に付けられて、歩く姿は前のめりで身体を幾重にも折り、いかにも八重に這ゐつくばり、その姿は物乞いを求む姿であった。その姿は、いかにも下民のサスラ（流離、目的地を定めず、あてもなく歩きまわる）いし、民がやらい（追い払う）するときの姿に似ていた。

このような悪態のソサノオの姿について、その原因がシム（血縁）にあることをアマテル神の大御神は、すべてを知し（知って）おられ、再び、アメ（天）に召されば、スサノオに天照らします。そのソサノオの将来像については、人の顔面も楽しむにと謂われ、そのことがミチスケの歌に詠まれていた。

「アハレ（天晴れ）　あなたはおもしろい　あなたは楽しい　あなたはさやけ（清い）　おけ（唄の掛け声）　さやけ（清い）　おけ（唄の掛け声）　あわれ（囃子詞）　おもしろい　さやけおけ　あなたは楽しい」と、相共に　手お打ちのべて　歌ひ舞ふは、千早振る（巫女のたすき布の乱舞いなる）とぞと楽しめば、これカンクラ（神楽の歌舞）の初めになり、これぞ天照大御神の発案なり。」

サスラオとなったソサノオは、アマテル神の勅りお真摯に受けられて、ネ（後の出雲国）に行かん（行くに違いない）。そして、ソサノオはネ国に行く前に、姉のヒルコ姫にまみえる（お目にかかる）たいと謂い、姉の意思を確認されるのであった。その姉の返事は「暫し（ちょっとの間）とて」と申されて姉と合うことを許せば、早速、姉は天の原にのぼられるのであった。天の原に登られたヒルコ姫が安河辺地区に一歩踏み入れられると、ソサノオの騒動が天の原中にととろきて鳴り響き、民心が天の原より離れて動く様子であった。

それを察したソサノオの姉のヒルコ姫はもとより、ソサノオのサスラオが天の原で荒るるお知れば、ネ国（細矛、後の出雲）の民の皆が驚きて、弟ソサノオの来るのは、さはあらじ（そう、容易く来らせるわけにいかない）として、ソサノオは、恐らく、心の中に国を奪ふらん（奪うことを考えているに違いない）と警戒されていた。

そう言えば、昔、ソサノオのかぞいろ（父母）は、ネの国をアマカミ（天神）より任された。だが、この度の行為で、ソサノオはそのヨザシ（委任された）の国お捨ておれば、もう、ネ（細矛、後の出雲）の国に後戻りすることができないだろう。だが、ソサノオは悪事の行為を忘れ、おべっかを使うなどのアヱ（御馳走）をして相手の機嫌を窺ふなどと、再び悪行を繰り返している。

そのソサノオは、髪をあげまき（総角）にし、裳と謂う着物の裾お束ねて袴とし、五百個の珠を環状にした首飾り品のミスマル（御統）に、糸をから巻きしてその中に千本の矢が入りて、あるいは、五百本の矢を入りて肘に着け、更に、ゆみはず（弓の両端）お振りて、また、剣持ち、その姿は堅く土固めた庭の土を踏んで足で蹴散らしている姿そのものがであった。更に、サスラオのサノオは厳（神聖）の雄叫に不満な点など混ぜてなじりアマテル神に問ふ。

そして、ソサノオ曰く。私に対して「なにを恐れているそ」。私は、むかし、アマテル神より「ネ（細矛、後の出雲）の国に行け」と勅りがあり、そのことを姉とまみえて（お目にかかりて）話した所、今すぐでなく後に行かん（行くに違いない）との結論になった。それは、遥か（気持ちが進まないさま）にネ（細矛、後の出雲）の国に来れば、疑わ（不審）で厳（アマカミ（天神））は返しません。姉がソサノオに問わく。「サココロは何。」その答えは「ネ（細矛、後の

出雲）にいたる後に子を生まん（子を生むに違いない）。そして、女ならば穢れ身に、男は清く」。これは神代よりの誓いなり。

７アヤ（紋）５３（2 行）～５６（４行）【本文】

	ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			ムカシキミ	マナキニアリテ	昔、君	真名井にありて←共
			ミスマルノ	タマオソソキテ	御統の	玉を渥ぎて
			タナギネオ	モチニウマセテ	タナギネお	モチ（コ)に生ませて
			トコミキニ	ハヤコオメセハ	床酒に	ハヤコを召せば
			ソノユメニ	トツカノツルギ	その夢に	十握の剣
			オレミキダ	サカミニカンデ	折れ三段	さ噛みに噛んで
			ミタトナル	ミタリヒメウム	三玉となる	三人姫生む
５５			タノイミナ	ワレケガレナハ	タのイミ名	われ穢れなば
			ヒメオエテ	トモハヂミント	姫を得て	共恥見んと
			チカイサル	ヒメヒトナリテ	誓ひ去る	姫一人成りて
			オキツシマ	サカムエノシマ	沖つ島	相武（サガム）江の島
			イツクシマ	ミカラサスラフ	厳島	自ら流離ふ
			サスラオノ	カゲノミヤビノ	サスラオの	陰のみやび（雅）の
			アヤマチオ	ハラシテノチニ	過ち	晴らして後に
			カエリマス		帰ります	

語句の解説

・ソソギ→そそ・ぐ 【▽雪ぐ・▽濯ぐ】 （動ガ五［四］）〔「濯く」の転〕水などで汚れを除く。清める。

・トツカノツルギ→と つかの つるぎ 【十▽握剣】 刀身が十つかみほどの長さの剣。

・サカミ→更に、噛み

・ミタ→三咫→古代の八十万人の平均の丈をひと間と言い、この物差しを間尺と謂う。間尺を八等分した内の三つの長さ。

・ケガレ→ 死・疫病・出産・月経などによって生じると信じられている不浄。

・ナバ→な ばかり 【名ばかり】 名前だけで、実質が伴わないこと。形ばかり。

原文の現在訳

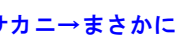
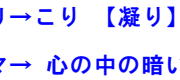
昔、君　真名共にありて　御統の　玉を渥ぎて　タナギネお　モチ（コ)に生ませて　床酒に　ハヤコを召せば　その夢に　十握の剣　折れ三段　サ噛みに噛んで　三咫となる　三人姫生む　タのイミ名　われ穢れなば　姫を得て共恥見んと　誓ひ去る　姫一人成りて　沖つ島　相武（サガム）江の島　厳島　自ら流離ふ　サスラオの　陰のみやび（雅）の　過ち　晴らして後に　帰ります

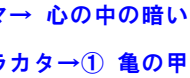
解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

昔、アマテル神の君は真名井にありて、古代の首飾りの御統の玉を清水で渥ぎ（清め）て、子が生まれることを天上の日の神に捧げられた。そして、タナギネおアマテル神の妃のモチ（コ)に生ませて、また、アマテル神は床酒の宴にクラキネの子のハヤコを召せば、その夢に十握の剣(刀身が十つかみほどの長さの剣）が、不吉に折れてミキダ（三段）に、サらに噛みに噛んで小さな三咫（間尺の 8 分の 3、約 60cm）の破片となる。その不吉な夢は現実となり、アマテル神の自らの妃のハヤコは三人姫のタケコ（後の沖つ島姫）、タキコ（後の江津島姫）、タナコ（後の厳島姫）を生むのであった。だが、その夢の真実を知っていたソサノオは、タ（天の原の統治）のイミ名を付けなければならないと考えたが、我（ソサノオ）の三つ子を産ませた穢れ（不浄）に対し名ばかりの姫を得て、ハヤコ共に恥を見んと誓ひし天の原を去るのであった。その三人の姫も一人前に成りてアマテル神は考えたが、例え、ソサノオの種子とは謂えど自らの妃のハヤコより生まれた姫には変わりないとして、早速、称え名を贈られ沖つ島（タケコ）、相武（サガム）江の島（タキコ）、厳島（タナコ）と名付けられた。それに対し、ソサノオは自ら流離ふサスラオの陰のみやび（雅）の過ちを晴らして後にネ（細矛、後の出雲）の国に帰ります。

７アヤ（紋）５６（４行）～６０（４行）【本文】

	ヲシテ	カナ文字	現在訳	
		ムカシフタカミ	昔両神	
５７		ノコシフミ　アメノメクリノ	残し書	天の巡りの
		ムシバミオ　ミルマサカニノ	むしばみ（日蝕）お	見るマサカニの
		ナカコリテ　ウムソサノオハ	中凝りて	生むソサノオは
		タマミタレ　クニノクマナス	魂乱れ	国の隈なす
		アヤマチソ　オハチチニヱテ	過ちぞ	男は父に得て
		ハオイダケ　メハハハニヱテ	地を抱け	女は母に得て
		アトヰネヨ　ウキハシオヱテ	天と寝ねよ	浮橋を得て
		トツグベシ　メハツキシホノ	嫁ぐべし	女はツキシホ（月経）の
５９		ノチミカニ　キヨクアサヒオ	後三日に	清く朝日お
		オカミウケ　ヨキコウムナリ	拝み受け	良き子生むなり
		アヤマリテ　ケガルルトキニ	過り（ち）て	穢るる時に
		ハラムコハ　カナラスアルル	妊む子は	必ず荒るる
		マエウシロ　ミダレテナガル	前後	乱れて流る
		ワガハチオ　ノチノオキテオ	わが恥お	後の掟お

 　  　ウラカタゾ　カナラズコレオ　占象ぞ　必ずこれお

 　ナワスレソコレ　な忘れそこれ

語句の解説

・マサカニ→まさかに、① いくらなんでも。よもや。② 現実に。本当に。たしかに。

・コリ→こり 【凝り】 ① 何か一つのことに熱中すること。こること。 ② こってできたしこり。

・クマ→ 心の中の暗い部分。心中に隠していること。秘密。

・ウラカタ→① 亀の甲・鹿の骨などを焼いて占うときに現れる形

原文の現在訳

昔両神　残し書　天の巡りの　むしばみ（日蝕）お　見るマサカニの　中凝りて　生むソサノオは　魂乱れ　国の隈なす　過ちぞ　男は父に得て　地を抱け　女は母に得て　天と寝ねよ　浮橋を得て　嫁ぐべし　女はツキシホ（月経）の後三日に　清く朝日お　拝み受け　良き子生むなり　過り（ち）て　穢るる時に　妊む子は　必ず荒るる　前後　乱れて流る　わが恥お　後の掟お　占象ぞ　必ずこれお　な忘れそこれ

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

イサナギ、イサナミは、**昔、両神**の思いを記録として**残し書**を書かれていた。その文章を見ると、**天の巡りの**中に於いては、**むしばみ（日蝕）お見る**との記述があり、その記述に**マサカニ**（いくらなんでも）むしばみ（日蝕）を見る**の**に熱き**中**、イサナミは**凝りて**体調を崩したとのことであった。そのことが災いしたのか**生むソサノオは**、**魂**が**乱れ**ていた。このことは国家の損失であり、**国の隈なす**（**国の**心の中の暗い部分をなす部分の）**過ちぞ。男は父に得て地を抱け。女は母に得て天と寝ねよ。そして**、男女は**浮橋**（仲人）**を得て嫁ぐべし。女はツキシホ**（**月経**）**の後、三日に清く**なるぞ。その時に女は、**朝日お拝み受け**て**良き子生むなり。**後、三日を**過り（ち）て**過せば、**穢るる時に妊む子**になり、その子**は**スサノオのように**必ず荒るる**ぞ。**前**と**後**に**乱れて**ツキシホ（**月経**）**が流る。**このことは、**わが**家系の**恥お後の掟お**占う時の**占象**（占うときに現れる形）**ぞ。必ずこれお、な**んで**忘れそ、これ。**

（7 アヤおわり）